

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00464

研究課題名（和文）ドイツ現代文学におけるアヴァンギャルド詩の系譜

研究課題名（英文）Consideration of avant-garde poetry in contemporary German literature

研究代表者

山本 浩司 (Yamamoto, Hiroshi)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80267442

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ダダなど20世紀のアヴァンギャルド文学運動は国民文学の枠を超える国際的な運動だった。国際化が進行し多言語的な環境で生まれ育つ作家が増える一方の21世紀の今日、ますます国民文学の限界が見えてきた。本研究は、海外の研究者らと連携しながら、戦後ドイツ文学の正史が看過してきた言語実験的なドイツ前衛詩の意義を50年代のウィーン派からTh・クリング、O・バステイオールを経て今日の詩人たちに至るまで歴史的に辿り、特にジェンダー論、アートとのインターフェース、多言語性（翻訳）、政治的挑発性と言語遊戯という四つの観点から戦後アヴァンギャルドの歴史的限界と後続世代による限界克服の可能性を検証しようと試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語実験の系譜は、戦後ドイツ文学史において不当に軽視されており、国内外でまだ研究は十分に進んでいるとは言えない。ドイツ語圏にあってすら研究が地域的偏りを見せている。「多言語性」「領域横断性」「遊戯性と社会批判性」「ジェンダー論」の四つのキーワードの元に巨視的なアプローチによってドイツ語アヴァンギャルド詩の系譜を時系列に整理しながら総合的に捉えることを試みた本研究は、リアリズム偏重の堅苦しい戦後ドイツ文学のイメージを修正することに寄与できるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The avant-garde literary movements of the 20th century, such as Dada, were international movements that transcended the boundaries of national literature. Today, in the 21st century, as more and more writers are born and raised in multilingual environments, the limits of national literature are becoming increasingly visible. This study, in collaboration with foreign scholars, traces historically the significance of the language-experimental German avant-garde poetry that has been overlooked by the canonical history of postwar German literature, from the Vienna School of the 1950s through Kling and Pastior to today's poets, focusing especially on gender theory, the interface with art, multilingualism. I have attempted to examine the historical limits of the postwar avant-garde and the possibility of overcoming those limits by subsequent generations from four perspectives: gender theory, interface with art, multilingualism (translation), political provocativeness, and language play.

研究分野：ドイツ文学

 キーワード：アヴァンギャルド詩 パステイオール クリング ウィーン派 ポッシュマン ファルクナー ジェン
 ダースタディ 翻訳

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

それまでの個別作家研究によって研究代表者は、21世紀になって三度のノーベル賞を受賞するなど国際的な声価をますます高める現代ドイツ小説の達成は言語実験的な文学の系譜めきには考えられない、という結論に至った。イエリネクは語のダブルミーニングをテコにして、テキストの多重的な読みを可能にする手法をウィーン派やヤンドルに学び、ヘルタ・ミュラーはパステイオールやロシア未来派、ダダの混淆造語法をわがものにした。しかし彼らが発掘した言語実験の系譜はこれまでの戦後ドイツ文学史では不当に軽視されてきたものであって、国内外でまだ研究は十分に進んでいるとは言えない。ドイツ語圏にあってすら、研究が地域的偏りを見せており、巨視的なアプローチによってドイツ語アヴァンギャルド詩の系譜を時系列に整理しながら総合的に捉えることが喫緊に求められている。「多言語性」「領域横断性」「遊戯性」をキーワードとするアヴァンギャルドは、リアリズム偏重の堅苦しい戦後ドイツ文学のイメージを抜本的に修正する可能性をはらんでいるのではないか、という想定のもとに本研究計画は立案された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アヴァンギャルド文学運動が国民文学の枠を超える国際的な運動であることを踏まえて海外の研究者と連携しながら、ドイツ文学の正史が看過してきた言語実験的なドイツ戦後前衛詩の意義を歴史的に検討するとともに、その遺産の批判的継承を今世紀の抒情詩や散文に跡づけ、現代の実験詩の見せる可能性の地平を測定することにある。戦争とホロコースト体験を原点とする戦後ドイツ文学は、現代ドイツ文学研究の泰斗初見基の指摘するように、アルノー・シュミットなど一部に言語遊戯性の例外はあるものの、リアリズムを基調とせざるをえなかった。一般にそれまでの文学との決別し、政治へと旋回したとされる68年世代の批判的文学も、代表的詩人エンツェンスベルガーの「アヴァンギャルドのアポリア」論に見られるように、メッセージ性を重視して言語実験を冷遇した点では変わらない。

本国の影響を受けた日本の戦後文学受容も同様の偏りに囚われてきた。この偏向を是正するために、本研究では、1950年代後半から60年代前半にかけて活動したウィーン派とその周辺詩人たちを戦後アヴァンギャルドの出発点と捉え、彼らに共感した二人の詩人、すなわち90年代におけるアヴァンギャルド復権の騎手トーマス・クリングとヨーロッパの同時代現象としてのウリポ運動にドイツ語圏からただ一人コミットしたオスカー・パステイオールを中継点として、21世紀になって新しい抒情詩(ゲアハルト・ファルクナー、モニカ・リンク、マリオン・ポッシュマン、アン・コッテン、シュテフェン・ポップら)の波が起きてきたという見方を提示し、言語批判や言語遊戯に立脚した現代小説(ヘルタ・ミュラー、エルフリーデ・イエリネク、カーチャ・ランゲ=ミュラー)も含めてウィーン派に端を発する前衛派の伏流はリアリズムの本流に劣らぬ影響力を持っていることを示すべく努めた。

3. 研究の方法

戦後ドイツ文学のなかでオーストリア文学は、同じドイツ語圏にありながら言語実験的な伝統を維持発展させた点で特異な位置を占めるという前提を本研究の出発点に据えた。中でもコンラート・バイアー、オズヴァルト・ヴィーナー、ゲルハルト・リューム、H.C.アルトマンの4人を中心としたウィーン派とその周辺に位置したエルンスト・ヤンドルやフリーデリケ・マイレッカーらの言語実験は先駆的であった。ただし運動としての短命さが示すように、ウィーン派には先駆けとしての限界があったのも否定できない。今日の観点から読み直すと、ウィーン派には男性同盟的な傾向が認められる。そこでジェンダー論やフェミニズム批評の観点から、彼らの仕

事を見直し、さらにグループの周辺にいてこれまで影に置かれていた女性作家たち、特に、マイレッカーとエルフリーデ・ゲルストゥル、さらにグループの終焉に位置するが反リアリズムという点で欠かせない重要作家イルゼ・アイヒンガーの三人に光を当てたうえで、その直接の後継を自任するエルフリーデ・イエリネク、カトリン・レグラ、アン・コッテン、マルレーネ・シュトレールヴィッツら現代作家たちの言語実験性を検証した。ジェンダー論的アプローチに加えて、アートとのインターフェースを第二のテーマに設定した。ウィーン派が目指したパフォーマンスアートとの協働はハプニングをメインとした短命なものであったが、ジャンル越境的な試みはクリングの絵画詩やゲルト・ヨンケの新音楽的手法の文学への応用など今日的意義をなお失っていない。ただし、現代ではデジタルアートやコンテンポラリー・アートに力点が移ったばかりか、ジャンル越境的な試みの方法も変質しており、その変化を適切に捉える必要があった。第三の論点としては、国境の壁が流動化し移動の自由が飛躍的に増大したことによって、多言語性がかつてないほど重要になっている。この文脈では、英語とドイツ語の二言語創作をしているP・ウォーターハウスとA・コッテンのほか、パスティオールやモニカ・リンク、ウリヤーナ・ヴォルフらが手がける詩の翻訳も重要な考察対象となった。彼らの翻訳は逐語訳から離れた二次創作的性格をもっていて、言語実験の翻訳並びにオリジナルとコピーの関係の揺らぎを考えるうえできわめて有益である。最後に、かつてのアヴァンギャルドにあって中心的な意味をなした政治的挑発性が最近の作家たちにあっては後退もしくは変質している点にも注意を向ける。現代の新しい抒情詩潮流の代表的な詩人リンクの言葉を借りれば、「ペイソス」(情念)から「ペイトス」(諧謔)への変化が起きている。特にポストモダニズム以降の文脈で言語の指示機能が問われたことと絡めつつ、それにもかかわらず言語遊戯性にも、アンガージュマン文学とは違った意味での社会的批判のポテンシャルが孕まれているのではないかという作業仮説を立て、それを検証していくこととした。

以上のジェンダー論、アートとのインターフェース、多言語性、言語遊戯と社会批判性という四つの点から 50-60 年代における試みの可能性と限界を検討したうえで、80 年代以降今日に至る実験詩の展開を時系列に見ていき、ウィーン派の孕んでいたポテンシャルが今日までにいかに現実化しているかを検証していく。その際、ドイツ文学に限らぬ他領域の国際共同研究者との議論を通じてより精密化していき、その成果の国際学会で口頭発表、さらには国際研究論集に投稿することで、戦後ドイツ文学史の読みかえに向けた準備作業を進めることとした。

4. 研究成果

20 世紀のアヴァンギャルド文学運動は出発点のダダからして国民文学の枠を超える国際的な運動だった。国際化が進行するなか人的移動と交流が進み、多言語的な環境で生まれ育った作家たちが増える一方の今世紀、ますます国民文学の限界が見えてきた。これを踏まえて本研究は、海外の研究者らと連携しながら、ドイツ文学の正史が看過してきた言語実験的なドイツ戦後前衛詩の意義を 50 年代のウィーン派からトーマス・クリング、オスカー・パスティオールを経て今日の詩人たちに至るまで歴史的に辿り、特にジェンダー論、アートとのインターフェース、多言語性(翻訳)、政治的挑発性と言語遊戯という四つの観点から戦後アヴァンギャルドの歴史的限界と後続世代による限界克服の可能性を検証しようと試みた。

2018 年度は四つの論点からとくに「アートとのインターフェース」と「多言語性」に焦点を当て、ルーマニアのドイツ人少数民族を出自とするヘルタ・ミュラーの写真と活字を使ったコラージュ詩、モニカ・リンクのイラストと詩の協働など、そして東ドイツの崩壊期に書かれた言語実験的な詩から社会主義の計画経済の破産を象徴する廃坑・廃屋を扱ったヒルビヒとブラウンの詩を選んで重点的に取り組んだ。ミュラーの詩にあっては言語を音節や文字にまで解体することで、ルーマニア語要素など言語の潜在的オムニフォン性を押し進めていることが明らかにされた。この詩的方法がいかに長編小説の創作にも取り込まれているかを日本独文学会誌に寄稿するとともに、彼女のコラージュ詩の歴史的アヴァンギャルドとの違いについてトリア大学の DFG(ドイツ研究振興協会)プロジェクトによる国際コロキウムで口頭発表した。またポスト

DDR時代のアヴァンギャルドについても、政治批判と言語遊戯との共生を指摘した論文をドイツで刊行される国際学術論集に投稿して採用が決まった。このほかパステイオールやモニカ・リンクについても2019年度の国際学会で発表するために準備を着実に進めた。

2019年度は一方でオーストリア現代アヴァンギャルド詩の読解作業、他方でヨーロッパ的文学運動としてのウリポにかかわり多言語に通じて現代ドイツのアヴァンギャルド詩を牽引したルーマニア生まれのオスカー・パステイオールの晩年の詩ならびに翻訳詩の試みに集中的に取り組んだ。現代オーストリアのアヴァンギャルド詩については、詩というジャンルに限定せずにアヴァンギャルドの伝統を取り入れながら更新したイエリネクやレッグラの散文や戯曲に「文学野」や「ハビトゥス」(ブルデュー)といった切り口からアプローチした。2020年3月にはウィーン文学館で資料調査を進め、ウィーン大学の共同研究者と研究打ち合わせを行なって、対象とすべき作家と作品の絞り込みを行った。それと同時にアン・コッテン、フリーデリケ・マイレッカーら日本での研究がまだ十分とは言えない女性アヴァンギャルド作家たちに関する文献収集を進めた。パステイオールについては、彼のアナグラム詩や本歌取りの手法がドイツ現代詩の言語刷新に与えた影響を考量するとともに、彼のフレーブニコフ翻訳が逐語訳を超えた翻案として機能していることを踏まえて、モニカ・リンクによる同様の試み(「パラライディング」)など、アヴァンギャルドと翻訳というテーマを柱の一つに据えた。パステイオールは76年から隔年開催されるビーレフェルトの国際的な実験詩コロキウム「新しい詩」にも深く関与しており、これに参画したマルセル・バイヤーらの詩人たちも比較考量の対象とした。特に翻案詩については、ボードレールの『悪の華』の数篇を音訳など様々な形で「寄生虫訳」(ミッシェル・セール)する詩集『シュベクトゥルム(スペクトラムをシュベック(脂肪)とトゥルム(塔)の合成語として捉え直したもの)』について2019年11月にドイツ、マルバツハ文書館で遺稿の集中的な調査を行った。6月に日本独文学会シンポジウムでヘルタ・ミュラーと翻訳との関連で、7月には日本独文学会阪神支部にてボードレール詩の寄生虫翻訳の諸相について発表した。寄生虫訳については同様の試みをしているエルンスト・ヤンドルや最近のモニカ・リンクの試みも参照し、意味を移す逐語訳ではなく、音声的類似をてこに原詩に寄生して自己増殖を遂げる翻訳が抒情詩の創造性に寄与することを検証した。各口頭発表はその後加筆訂正して論文にまとめた。日本独文学会シンポジウムでの発表は同学会のシンポジウム記録論集に、阪神学会での発表は神戸大学独文学会機関誌に公表した。

2020年度は、2019年度末のウィーンでの研究滞在で資料の収集、海外研究協力者との意見交換に大きな成果が出たのを受けて、良いスタートを切れるかと思いきや、Covid-19 ウィルス感染の急激な拡大によって、大学図書館は愚か、個人研究室へのアクセスすら大幅な制約を受けるとともに、オンライン授業対応に膨大な時間と労力を費やすこととなった。夏休みや春休みの海外渡航計画も中断するほかなく、研究実施計画は大幅な修正を余儀なくされた。かろうじて口頭発表した成果を加筆訂正し学術誌に掲載することができるだけだった。現代オーストリア文学にあってノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクとともに、ウィーン派の言語実験的な系譜に連なるカトリン・レッグラの戯曲作品に取り組み、接続法一式による間接語法を劇言語に投入した実験の意義をネオリベリズム批判というテーマと関連づけて考察した日本独文学会文化ゼミナールでの研究発表原稿に大幅な加筆訂正を加えて同ゼミナール叢書にドイツ語論文として発表した。同じく女性の詩人マリオン・ボシュマンの庭園詩集を、とりわけポストジャポニズムの観点から取り上げ、ロヴィス・コリントらモダニズム風景画の実験的な手法を意識しつつ借景という東洋庭園の古典的な技法を詩に援用した詩人の試みの意義を考察し、アジア・ゲルマニスト会議記念論集にドイツ語論文として発表した。2019年度に集中的に取り組んだオスカー・パステイオールについては、初期のロシア抑留体験詩と後期の表層翻訳詩を分析して、この実験詩人において抑留体験のトラウマが、隠れた形であれ、いかに一貫して創作の中に流れているか跡づけ、実験詩が言葉遊びに淫することなく、歴史的トラウマ体験に迫る力をいかに持ちうるかを考察した。その成果は、ドイツで刊行された論集にドイツ語論文として、また日本独文学会研究叢書に日本語論文として発表した。

2021 年もコロナ禍で、海外渡航ができないなど大幅な制限を受け、当初の計画通りに研究を進めるのは困難を極めた。そうした中で、言語実験的なドイツ現代詩のうち引き続きウリボ詩人パスティオールと転換期東ドイツのヒルビッチに重点を置いた。マルバツハ文学資料館で収集してあった手稿や創作メモなど一次資料を手がかりにして、遺稿詩集『シュベクトゥルム』を中心に、ルーマニア＝ドイツ人詩人オスカー・パスティオールの作品にかすかに残るソ連収容所（グラーク）体験の痕跡を探る作業を行ない、この詩人をモデルとしたノーベル賞作家ヘルタ・ミュラーの小説『息のブランコ』と照らし合わせて解説した。その上で、とりわけ、オーストリアの言語実験的な前衛詩人エルンスト・ヤンドルの「表層訳」という音訳の方法の精緻化に集中的に取り組んで、本歌取りにも似たオリジナル作品に寄生して意味を変容させていくパラサイト的な手法をパスティオール独自のものとして炙り出して、言語遊戯的な詩の中に暗示的な形でグラーク移送体験を織り込んだ詩人の独自性を浮き彫りにした。東ドイツの前衛については、ヒルビッチとブラウンの工業的風景詩を東ドイツ建国期の楽観的な時代からの変容として論じた。研究成果としては、パスティオールについては論文「オスカー・パスティオールとヘルタ・ミュラーのラーゲリ」として『早稲田ブレッター』29号に、東独のアヴァンギャルドについては論文「“des letzten tagesbaus sumpfiger wunde”. Zur Poetologie der ausradierten Landschaft in der Lyrik von Wolfgang Hilbig und Volker Braun」として独仏の研究者の編纂する論集『Wolfgang Hilbig's Lyrik』（Berlin 2021）に発表した。

研究期間を延長した 2022 年度はコロナ禍の制限が緩和されるなか 5 月、8 月、11 月、年未年始と海外出張を果たせ、ウィーン文学館、オーストリア国立図書館、ベルリン・フンボルト大学図書館、自由大学図書館、ベルリン国立図書館にて集中的にドイツアヴァンギャルド詩の資料の収集をして過去二年間の遅れを取り戻すことに傾注し、複数の研究成果の発表に取り組むことができた。5 月にはハンブルク大学で開催された国際学会「Poetry and contemporary visual culture」にて、デジタル時代の絵画詩の特徴を論じるために、デジタルアートの騎手イヴ・ネッツハンマーと協働したファルクナーの詩集『イグナチア』（2014）について口頭発表をした。発表原稿に加筆訂正したものが、査読の結果、ドイツで 2023 年秋に刊行される論集に採択されることが決まっている。9 月にはトリア大学主催のオンライン学会にて、「Erinnerungen an Gulag aus zweiter Hand（セコハンのソ連収容所の記憶）」と題する発表を行い、第二第三世代の小説によるソ連収容所の記憶文学とともに、第一世代、特にオスカー・パスティオールの難解な詩による想起の作業を取り上げた。ウィーンのアヴァンギャルト詩については、イルゼ・アイヒンガーとシュトレールヴィッツやヨンケとの生産的な交わりについて徹底的に取り組んだ。前者のアイヒンガー詩のフェミニスト的解釈が文体分析を進めるうちに意図を裏切ることを明らかにする一方で、後者については、シェーンベルクやウェーベルンの新音楽の技法の文学へ応用し、散文でありながらプロットやキャラクターに依存しない反復や反転という技法によってジャンルを超越しアヴァンギャルドな詩的言語を達成していることを明らかにした。どちらの取り組みも、オーストリアで 2024 年にウィーンで刊行される『Konstellationen österreichischer Literatur. Ilse Aichinger（オーストリア文学の星座 アイヒンガー）』に収録されることが決まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 6件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Hohn-ich-Protokoll. Idiotische Dekonstruktion des Subjekts bei Monika Rinck	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Matthias Fechner / Nikolas Immer / Henrieke Stahl (Hg.): Wiederkehr des Subjekts?	6. 最初と最後の頁 339-350
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 0
2. 論文標題 "des letzten tagebaus sumpfiger wunde". Zur Poetologie der ausradierten Landschaft in der Lyrik von Wolfgang Hilbig und Volker Braun	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Banoun, Terrisse, Arlaud und Pabst (Hg.): Wolfgang Hilbigs Lyrik. Eine Werkexpedition. Berlin (Verbrecher Verlag) 2021	6. 最初と最後の頁 187-208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山本浩司	4. 巻 29
2. 論文標題 オスカー・パスティオールとヘルタ・ミュラーのラーグリ 第二世代の証言文学の可能性を考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田ブレッター	6. 最初と最後の頁 7-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本浩司	4. 巻 139
2. 論文標題 私はパラサイトだった H・ミュラーと O・パスティオールにおける寄生的翻訳と強迫神経症的読解	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新本 史育 編『創作システムとしての翻訳』（日本独文学会研究叢書 139）	6. 最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 8.2
2. 論文標題 "Meine Sozialisation ist das Lager." Zu den "Russlandgedichten" der deportierten Dichter Oskar Pastior und Yoshiro Ishihara.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Fechner / Henrieke Stahl (Hg.): Subjekt und Liminalitaet in der Gegenwartsliteratur. Band 8.2 Berlin (Peter Lang) 2020	6. 最初と最後の頁 405-430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Habitus im Zeitalter des globalen Neoliberalismus. Einige Ueberlegungen am Beispiel der neueren Texte Kathrin Roegglass	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Akten des JGG-Kulturseminars 1 (2020)	6. 最初と最後の頁 376 - 392
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 1
2. 論文標題 "mitten im japonisierenden Wandbehang". Zum Japanbild in Marion Poschmanns Lyrikband "Geliehene Landschaften"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Muroi, Yoshiyuki (Hrsg.) Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo. Muenchen 2020.	6. 最初と最後の頁 542-549
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 山本浩司	4. 巻 14
2. 論文標題 「ジャポニズムの壁掛けの真っ只中に」 - - マリオン・ボッシュマンの庭園詩集『借景』について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸ドイツ文学会『DA』	6. 最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 17/2
2. 論文標題 "Ueberall, wo ich bin, hat alles, was sich da befindet, den Riss. Kontamination, Komposita und Parataxe bei Herta Mueller.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Neue Beitræge zur Germanisitik	6. 最初と最後の頁 135-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 0
2. 論文標題 Junk Space im Zeitalter des Neoliberalismus. Eine poetologische Chronotopographie bei Kathrin Roeggla.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Wohnen und Unterwegssein. Interdisziplinaere Perspektiven auf west-oestliche Raumfigurationen	6. 最初と最後の頁 391-410
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hiroshi Yamamoto	4. 巻 0
2. 論文標題 "Was glaenzt, das sieht". Zur autofiktionalen Schreibweise in der Geheimdienst-Trilogie Herta Muellers	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 AKTEN DES XIII. INTERNATIONALEN GERMANISTENKONGRESSES, SHANGHAI 2015 Germanistik zwischen Tradition und Innovation	6. 最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 Erinnerungen an Gulag aus zweiter Hand
3. 学会等名 interfacing 2022 "Telling Innovations and Tradition East and West", Universitaet Trier (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 "Schneiden, Spleissen und punktgenaue Mutation!" ZurText Bild Interferenz im digitalen Zeitalter in Gerhard Falkners und YvesNetzhammers "Ignatien"
3. 学会等名 Poetry and contemporary visual culture / Lyrik und zeitgenoessische Visuellekultur (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 "des karpfens - der muskuloese sohn zerrt rebhuhn " Zum sprachenvkontaminierenden Uebersetzungsverfahren Oskar Pastiors
3. 学会等名 第229回阪神ドイツ文学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 Blick unter den Rock und Leichen im Keller. Ein Vergleich literarischer Gestaltung der Unterwelt-Chronotopoi bei Wolfgang Hilbig und Guenter Grass
3. 学会等名 Systemwechsel, literarisch. Ost- und Westdeutschland um 1989 im internationalen Vergleich, Deutsches Literaturarchiv Marbach (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 "BIS ES knallt im lau/ern/den G/et/rei/de " Grenzerfahrungen in den Collagegedichten Herta Muellers
3. 学会等名 Gastvortrag im Rahmen des Master-Seminars "Lyrik im digitalen Zeitalter " von Prof. Dr. Claudia Benthien an der Universitaet Hamburg (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本浩司
2. 発表標題 私はパラサイトだった H・ミュラーとO・パステイオールにおける寄生的翻訳と強迫神経症的読解
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 Parasitaere Uebersetzungen bei Monika Rinck und Oskar Pastior
3. 学会等名 L'ENTRE-DEUX LYRIQUE / THE BETWEEN-NESS OF LYRIC / LYRIK IM DAZWISCHEN. Second biennial conference of INSL at the University of Lausanne (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 "BIS ES knallt im lau/ern/den G/et/rei/de" Grenzerfahrungen in den Collagegedichten Herta Muellers
3. 学会等名 Lyrik und Existenz in der Gegenwart. Trier (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 Gestirne, "Viruschen" und das Verschwinden des Ichs. Ueberlegungen zu posthumanen Landschaften in der rezenten japanischen Lyrik
3. 学会等名 Natur in der Lyrik und Philosophie des Anthropozäens: zwischen Diagnose, Widerstand und Therapie (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroshi Yamamoto
2. 発表標題 Habitus im Zeitalter des globalen Neoliberalismus. Einige Uebelegungen am Beispiel der neueren Texte Kathrin Roeggias
3. 学会等名 Tateshina-Symposion 2019. 61. Kulturseminar der JGG: Literarischer Habitus(JGG) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------